

第2回

タダで行けるアメリカの理系大学院 ——院生だって給料がもらえる！

あお たに まさ やす
青谷正妥
京都大学留学生センター



★ 東大の院生って給料がないの？

アメリカの有名大学はほとんどが私立で、たとえばStanford大学の授業料は\$28,563(約320万円、Engineeringは\$30,453)ですから、これを見たとき「行けるはずもない…」とあきらめてしまうのも無理はありません。ところが、アメリカのまともな大学の理系の大学院生で、授業料を1セントでも払っている人は国籍の有無を問わず非常にまれです。提出書類うんぬんの前に、まず、この金のお話をしましょう。

地方の秀才が地元の大学に行き、大学院で上を目指す話をしましたが、その最大の理由は奨学金です。プロからの勧誘に、「毎日野球をして遊ばせてもらって、そのうえ給料まで!？」と目を丸くする施設育ちのベープ・ルースに、「この子はプロ野球も知らないのか」とスカウトがそれ以上に目を丸くしたという逸話があります。ところが、アメリカの大学院は、勉強させてくれて授業料を免除してくれたうえ、さらに給料までくれるのです。しかも生活に十分なほど。

信じられないかもしれませんが本当です。覚えていますか？「入学試験に受からないと、どうして入学できないの？」といったRichardの愚問(この連載の1回目)。アメリカ人なら「東京大学の理系の大学院生なのに、給料がないなんて信じられない(You've got to be kidding!)」と驚くはずです。そういうわけで、アメリカの理系大学院のfinancial support(学資援助)の実態を説明しましょう。

1) Three Ships

基本的にはfellowship, research assistantship, teaching assistantshipの三種類があり、授業料免除がつきますので、

★ これで十分に生活できます。fellowshipの出所はさまざまですが、これはただもらうだけのいわゆる奨学金で、おいしい分だけ数も限られており、外国籍の院生にはかなりの狭き門であるのが普通です。したがって、狙い目は上記のassistantshipsですが、面白いのはこれらがsalary(週20時間の非常勤)の扱いを受けていることで、大学院生の労働組合がある大学すら存在します。

2) Research Assistantship (RA)

名目上は、指導教官の研究の手伝いに対して報酬がでるというのですが、理系の場合、実際には自分の学位のための研究をするだけです。もちろん、それが研究室全体の大きなテーマに貢献するという点は日本と変わりません。外国人にとっては、高い英語力を要求されないという意味でも非常にやりやすい仕事であり、これがthe best scenarioです。とくに金のありあまっている有名大学の工学系などでは、夏のあいだは、週40時間の常勤として倍額を支給してくれることもあります。なお、research assistantshipはそれぞれの教授が自分の取ってきたgrantなどから出すのが普通です。

3) Teaching Assistantship (TA)

その名のとおり、教官のteachingの手助けをすることで、理系の場合は、discussion sessionという復習・演習の時間を受けもったり、実験を監督したり、大学院のコースの採点係をしたりします。Discussion sessionとは、授業でわかりにくかったところや、カバーできなかったところを説明したり、宿題や演習問題を解いたりするための時間で、いわゆるdebateの時間ではありません。RAより高い英語力が必要なのは確かですが、理系の場合は知識さえしっかりしていれば、

Your complete study abroad guide

少しぐらい英語がつたなくても何とかなるものです。なお、外国人のTAにはTOEFL以外に英会話のテストを課す大学院もたくさんあります。Teaching assistantshipは学科全体で運用されるのが普通で、その資金も毎年、学科の必要経費として計上されています。

地獄の沙汰も

具体例として、Stanford大学のSchool of Humanities and Sciencesに所属するDepartment of Chemistry(スタンフォード大学文理学部化学研究科)を見てみましょう。これは日本の理学研究科化学専攻にあたるもので、工学研究科などよりは貧乏ですが、数学専攻よりは金があり、典型的・平均的なケースです。

WEB siteは<http://www.stanford.edu/dept/chemistry/grad/financial.html>ですが、そこに書かれていることを抜粋しながら説明しましょう。まず、

Financial support of graduate students is provided in the form of research assistantships, teaching assistantships, and fellowships. Historically, all graduate students in good standing have received full financial support (tuition and stipend) for the duration of their graduate studies at Stanford.

「RAとTAとfellowshipsがあって、これまで普通の成績の人はみんな、授業料免除も生活費も学位が終わるまでもらっているよ」と肝っ玉ぶりを発揮し、

First-year students for the 04-05 academic year will receive \$25,185.

「ほれほれ、1年目は\$25,185だよ。(授業料以外)」と札束を積むに等しい発言が続き、

Stipends are set such that the students' net income is equivalent to the net income received at other major universities, and is consistent with the cost of living in the Stanford area.

「もちろん他大学に負けない金額さ。このへんの物価も考慮してるんだ」と釘を刺し、

PGS and ABD

Professional Graduate Studentという言葉があります(PGSと略すことは、実はありません)。今回、さんざん大学院生の給料の話をしたので、皆さんは、プロの大学院生とは給料をもらいながら懸命に勉学に励むプロ意識に満ちた院生に違いないと納得しそうですが、実は違います。勉学どころかいつまでたっても学位が取れず(取らず?)、大学院にだらだらと居座っている学生のことを指しているのです。つまり、大学院生であることが本業=終着駅のようにになっている人ですが、上述のごとく暮らすだけなら不自由しないので、理系には案外たくさんいたりします。

これと似たものにABD(all but dissertation)という表現(学位にあらず)があり、こちらの方は、博士論文以外はすべて終わったものの、論文研究でつまずいて卒業できていない人です。普通はあきらめて学位なしで院をやめた人で、研究が遅々として進まない学生ではありません。文系でよく使われ、「ぼくの学位はABDだ」と自嘲的にいう人にときどきでくわします。

余談ですが、“She graduated with a BS and an MRS(彼女は卒業と同時に結婚した)”というのがあります。BSは学士、MRSはわかりますね、最近はおっぱらMSのようですが。

Additionally, first-year students arriving from distant locations may receive a travel allowance to partially defray the cost of necessary travel.

「遠くから来てくれる君には旅費の一部を肩がわりしよう」とsweetening the pot(色をつけること)も忘れません。

彼らがここまでがんばるのには、理由があります。大学院生の勉学を金銭的にもサポートするのが当たり前というacademic cultureがあるうえに、学生が書類選考で数校を併願するのは当然なので、優秀な学生をめぐって熾烈な取り合いがあるからです。Stanford大学の場合、車で1時間強のところなのにUC Berkeley(カリフォルニア大学バークレー校)があるのですから、がんばらざるをえませんね。

いずれにせよ、有名校はもとよりアメリカの理系大学院の多くは、授業料を免除し、かつ暮らせるだけの給料もくれるので心配無用です。そんなわけで、高まりましたか、あなたのmotivation?

では、「お行きなさい」(ドラマ「スカイハイ」の口調で)。